Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報誌

第 54 号
（創刊：1994年12月15日）

南塘（なんとう）だより

2009年（平成21年）6月30日

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：水沼英樹病院長補佐）
〒036-8563　弘前市本町５３
TEL：0172-33-5111（代表）
FAX：0172-39-5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/
※南塘とは，弘前帝史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言
～新型インフルエンザ対策～

弘前大学医学部
附属病院長　花田 勝美

本年４月，メキシコ初の豚インフルエンザに始まり，ヒト・ヒト感染が現実のものとなったことから警戒レベルもフェーズ５に引き上げられました。本学は学術上海外との交流も盛んであり，かつ大型連休を前にして教員，学生，職員などの海外渡航が予想されたため緊張感が走りました。全学では保健管理センター，本院では感染制御センターからそれぞれ，現状の周知と注意事項をいち早く発信しました。加えて，本院では24時間相談対応の連絡網を立ち上げました。５月末の段階ではやや終息に向かいつつある如くですが，なお，予断は許しません。本院は，津軽地域の防疫体制のなかで弘前保健所を中心として今後も適切に対応してゆくつもりです。職員には，不足の事態に備え，共通初療室の位置と活用の仕方を理解いただきたいと思います。まずは，感染制御センターにご連絡下さい。

▲写真１

さて，今期も，本院にはそれぞれの立場から重要な訪問者がありました。2月22日には渡辺孝男厚生労働副大臣一行が訪れました。遠藤正彦学長との懇談のあと，本院で高度救命救急センターやヘリポートの設置，医師不足問題について極めて密度の濃い話し合いがなされました。副大臣は幸運なことに耳鼻咽喉科の新川教授と大学の同窓とあって和やかなムードづくりをしていただきました（写真１）。5月25日には，青森県と緊密な関係にある，米国オハイオ州，クリーブランド・クリニックのDr.クリスチン･テイラーおよびDr.リリー・ピエンの訪問を受けました（写真２）。Dr.テイラーは，レジデント教育担当の医師に対する教育を主任務とする医学教育の第一任者であり，Dr.ピエンは呼吸器（アレルギー）内科の医師でした。お二人には本県の医師不足の現状を認識してもらい，米国における退職医師の活用法について教えていただきました。また，院内の看板の英語表示が外国人に理解できるかについてもアドバイスをいただきました（写真３）。立ち会いをお願いしました各診療科，診療部門の先生方にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

（21年6月3日記）

▲写真２

▼写真３

国立大学附属病院感染対策協議会サイトビジット実施　（3/16 - 17）

国立大学附属病院感染対策協議会は，国立大学病院が主導的に我が国における院内感染対策を遂行・発展させるために平成13年度に設立された組織です。サイトビジットと呼ばれる訪問改善支援は，内部で気づかない点を外部の調査担当者から指摘を受け，より充実した院内感染対策を実施することを目的に平成17年度から行なわれています。この度，本院も自主的にサイトビジットに応募し，実現したものです。

調査は現在，わが国のトップレベルの現場で感染対策に活躍されている医師・看護師の方々からの評価を受けることができました。担当者の先生方は大阪大学医学部附属病院感染制御部部長の朝野和典先生，北海道大学病院感染制御部副部長の石黒信久先生，新潟大学医歯薬総合病院看護部・感染管理部看護師長の内山正子先生，京都大学医学部附属病院専任看護師長の井川順子先生でした。第１日目は午前が提出文書によるヒアリング，午後は現場調査，第二日目は午前に提出を求められた資料を作製の上，再度ヒアリングと現場調査を受け，午後に全般的な講評をいただき，正式には感染対策協議会会長から，当院病院長宛に報告書をいただきました。

総括として，当院の適正な院内感染対策，他施設にない検査部の採痰ブースなど優れた設備を指摘していただいた上で，改善点として以下のことが指摘されました。1）職員の意識と病棟システムの面で，清潔域と不潔域の混在，逆に不必要な差別化がある。2）感染対策と医療安全の面から，院内のさまざまな物品が外部から直接アクセス可能な状態にある。3）特定機能病院として，感染症専門医としての機能の必要性を議論したうえで，感染制御センターの医師の専任化を視野に機能拡充を図ること。看護師の面ではICNの感染管理認定資格取得を病院としてバックアップすることなどが挙げられました。日ごろ気に留めていなかった点を含めて細部にわたって有益な改善すべき点を指摘していただきました。院内感染制御は，医療の質と安全の指標といわれます。具体的に指摘された内容の一部は既に実践されています。大変お忙しい中を遠くから来ていただいた方々にあらためて深謝いたします。

（感染制御センター副センター長　玉澤直樹）

「平成20年度ベスト研修医賞選考会開催」

卒後臨床研修センター長　加藤 博之

平成20年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が，2月27日18時より医学部コミュニケーションセンターで開催された。本賞は平成16年度からの卒後臨床研修必修化に合わせて創設された賞であり，今回が５回目を迎える。当日は，あらかじめ卒後臨床研修センター運営委員会により優秀研修医に選ばれた齊藤良明先生（一年次），竹内朗子先生（二年次），吉澤佳織先生（一年次）（五十音順）の3名の研修医が，「ここがポイント！　研修医の心がけ」と題して，この1年間の研修生活で自分が重視してきた点について，一人10分間ずつスピーチを行なった。聴衆は学生および教職員で，スピーチのあと，参加した49名の学生諸君（特にこの1年間臨床実習で研修医に間近に接してきた5年生が中心）による投票が行なわれ，吉澤佳織先生が平成20年度ベスト研修医に選ばれた。引き続き表彰式が行われ，吉澤先生に賞状，純銀製メダル，記念品が，齊藤，竹内両先生には優秀研修医賞として賞状，楯，記念品が贈られた。その他にも各種特別賞として，吉澤佳織先生に「ベストパートナー賞」，齊藤良明先生に「レポート大賞」，渡邉清誉先生に「セミナー賞」，鎌田耕輔先生に「久保田賞」が贈られた。つづいて懇親会に移り，5年生から，今や恒例となった「ベスト指導医賞」，「ベスト6年生賞」の発表が本年も行われ，教職員も多数参加し盛会裏に終了した。ベスト研修医賞は単に研修医のモチベーション向上に寄与しているだけでなく，研修生活・臨床実習を通じて時間と場を共有してきた研修医・学生の間に，「屋根瓦方式」教育が定着するためにも大いに役立っているものと考えられる。

▲花田病院長よりベスト研修医賞を贈呈される吉澤佳織先生

各診療科の紹介
【光学医療診療部】

光学医療診療部は1998年４月に設立され，それまで旧第一内科（消化器・血液・膠原病内科）で施行されていた消化管内視鏡検査と，旧第二内科（循環器・呼吸器・腎臓内科）が行っていた気管支内視鏡検査・治療が行われることとなりました。発足当時から２度の引越しを経て，2008年１月に新外来診療棟が完成し現在に至っております。

中央診療施設の一施設として機能してり，看護師は放射線部の内視鏡技師を含む３人体制で配属され，また，内視鏡の洗浄は主にMEセンターから臨床工学技師が派遣され担当しています。

内視鏡の管理に関する一元化と中央化に向けて，現在希望される診療科に関しては洗浄・ 管理も行っております。また消化器内視鏡における詳細は①消化器癌の診断（narrow band imagingと拡大観察），②早期消化器癌の内視鏡的治療（内視鏡的粘膜下層剥離術（上部，下部）），③消化管出血の止血，④消化管狭窄の治療，⑤内視鏡下胃瘻造設，⑥肝胆膵疾患の診断，⑦肝胆膵疾患の治療（結石の治療，ステント挿入），⑧超音波内視鏡，⑨炎症性腸疾患の診断と治療，⑩カプセル内視鏡を用いた小腸疾患の診断，⑪小腸内視鏡を用いた診断と治療などです。

さらに研究内容として①内視鏡画像解析による病変の客観的評価および病態との関連性についての研究，②新しい内視鏡治療技術の開発，③内視鏡画像からみた炎症性腸疾患の予後に関する推測と治療法の選択，④網羅的解析による炎症性腸疾患の新たなバイオマーカーの確立などです。

炎症性腸疾患は原因不明であり，近年，生活スタイルの欧米化などにより本邦でも急激に増加しており，厚生労働省難治性炎症性疾患対策事業の対象疾患となっております。当診療部（及び旧第一内科）では，対策事業開始時点より，分担・研究協力施設として参加，治療指針の改定等含めその責務を果たしてまいりました。現在多施設共同研究として①クローン病患者のQOLに関する多施設共同研究，②潰瘍性大腸炎の危険因子に関する多施設共同・症例対照研究，③潰瘍性大腸炎長期経過例へのサーベイランスシステムの確立・ 狙撃生検とstep biopsyの有用性に関する比較検討，④クローン病の外科治療とinfliximabの併用療法，⑤潰瘍性大腸炎に合併するサイトメガロウイルス感染例におけるGanciclovir・adacolumn 併用効果に関する検討などを行っております。また，臨床試験として潰瘍性大腸炎に関するD2E7の第Ⅱ・ Ⅲ相試験を行っております。

今後も新たな技術の導入と診療，研究，教育，啓発にも取り組んでいく予定ですので宜しくお願い申し上げます。

（光学医療診療部 准教授　石黒 陽）

先憂後楽
地球環境を考える

腫瘍内科
教授　西條 康夫

１病棟８階からは，雄大な岩木山を間近に見ることが出来ます。まだ６月に入ったばかりですが雪は少し残すのみだけです。今年は雪があるうちにと４月上旬と下旬に２回岩木山に登ってきました。下旬には直前の降雪で銀世界でしたが，上旬には雪が少なく山頂付近は岩のみで大変な驚きでした。岩木山を知り尽くしている登山家のブログによればここ数年の岩木山の積雪量は激減しているとのことです。一方，弘前の桜の開花も例年より早く，地球温暖化の影響を感じぜずにはいられません。

報道によればCO_2排出による地球温暖化は経済発展とともに急速に進み，実際CO_2濃度の上昇が確認されており，今世紀末には２～４度の温度上昇が見込まれており，地球環境が大きく変わることが懸念されています。

当たり前ですがヒトは動物であり，自然環境なしに生きていくことはできません。しかし，現代では自然を感じないまま生活することが多くなってきています。私でさえ，朝に研究室・病院に来て，夜帰宅するまで建物から出ない生活を続けていることに時に自覚し愕然となるときがあります。

ところで，地球環境に対して病院とはどういう存在でしょうか。バイオハザードの問題等で，ほとんど全ての医療器具は使い捨てとなり，その結果大量の医療廃棄物が出されています。また，一方では多くの薬剤が使用・処方され，ヒトの体を経て自然界へ放出されます。実験室においても同様のことが起こっています。ほとんどの経済活動は環境破壊と関係していますが，病院も例外ではありません。

皆さんも既にご存知と思いますが，政府では環境政策として，3Rを推進しています。つまり，reduce，reuse，recycleです。我々の職場では，reuseは不可能なことが多いかもしれませんが，reduceやrecycleはできるのではないでしょうか。私たちの小さな努力が，このすばらしい津軽・青森・日本ひいては地球の環境を守ることに繋がると思います（こんなことを，日曜日の午前中岩木山のふもとの市民農園を耕しながら考えました）。

“看護の心をみんなの心に”

5月12日は「看護の日」。

“看護の心をみんなの心に”をメインテーマに，看護職は各地でこの日，さまざまな取り組みをしております。看護部でも毎年，お花を飾ったり，入院患者の皆様へメッセージカードをプレゼントするという一大イベントが展開されます。今年は外来待合ホールに向かう廊下窓に，フラワーロードが演出され，通るすべての人々の目を楽しませてくれました。足を止め，お花を鑑賞なさっておられる方も見受けられ，この「看護週間」における「花」のある風景に心が和んだ一時でした。また，春一番に，カードのデザインを募集して考案します。今回は，ビタミンカラーで上へ上へと向かう空想の華ということで，見る者誰もが自分の想像でどんな花にも見えるというメッセージカードとなりました。看護師はそのカードに患者様お一人お一人に合わせて，心を込め，互いに工夫をして作成しお渡ししています。患者様は，思いがけないカードをプレゼントされ，驚きや喜びと感謝の言葉をお返しして下さいました。「ありがとう」「手作りの文章は嬉しいなあ」と言って下さり，私達もまた良い気分になり，心が嬉しくなります。これからも，患者様からいただいた「心」に対して，「思いやりと笑顔」で看護の心をみんなの心にお届けできたらと思っております。

（二病棟4階　品川弘子）

この人 No.1

本院の多方面で働くスタッフを紹介いたします。

産科婦人科
藤井俊作 先生

イケメンで仕事ができて，その上，異性に人気があるとくれば，同性にとっては「敵」以外の何者でもないのに，この人に限ってはそれが全く感じられない。当科の准教授，藤井俊策君である。当科の生殖医療の責任者としてその臨床能力には定評があり，県内は言うまでもなく国内的にも弘前にこの人有りとして通っている。体外受精の導入により生殖医療は隔世の進歩を遂げ，最近ではこれを，Assisted Reproductive Technology，略してARTと呼ぶようになってきた。しかし，彼の真髄は正真正銘のART，いわゆる芸術にも通じているところだろうか。学生時代は画家として生活費を稼いでいたとの伝説があるほどで，いまでも当科のホームページの制作と管理，さらには同窓会誌の表紙や各種ポスターのデザインに非凡な才能を発揮している。要するに刺激に対する感性に優れかつその表現能力が高いのである。長年，卒後臨床研修Ｂプログラム責任者として活躍していたが，数年前からは診療オーダリングシステムワーキンググループの委員長に抜擢され病院業務の円滑化に目を光らせている。趣味は家庭菜園。どこまでも作ることが好きな人物。見ていて清々しい。

（産科婦人科　水沼英樹記）

日本内分泌学会　研究奨励賞を受賞して

内分泌内科・糖尿病代謝内科・感染症科
講師　**蔭山 和則**

この度，日本内分泌学会より第29回研究奨励賞の受賞を賜わりました。これまで共同研究をしていただきました諸先生及び関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。また，特に，研究の基礎を築いて下さり，日頃より一方ならぬご指導ご鞭撻をいただいております当科須田教授，高度先進医学研究センターでお世話になっております伊東教授，小児科　伊藤教授と土岐先生，数々のご助言，お力をいただいております弘前大学医学研究科，附属病院及び内分泌代謝学講座の関係各位の方々には，この場をお借りしまして，改めて感謝申し上げたく存じます。

今回の同賞は，「新たなストレス応答機構の解明」として，視床下部corticotropin-releasing factor（CRF）の統御機構とその下垂体作用，関連ペプチドの末梢作用，及びCushing病の病態解明に関するこれまでの研究の結果いただきました。CRFは，中枢神経系においてストレス反応の中心的役割を果たしていますが，そのファミリーペプチドを含めて，免疫系，神経系と密接なつながりを有し，全身において多様な影響を発揮する重要なホルモンと考えております。

今回の受賞を励みに致しまして，地元の医療に貢献しながら，内科内分泌学の発展の一助となれますように，世界に向けて研究成果を発信したいと思っておりますので，今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

日本医学放射線学会総会学術賞シルバーメダル（電子ポスター賞）を受賞して

放射線部 准教授　**青木 昌彦**

この度，4月16-19日に横浜で開催されました第68回日本医学放射線学会総会におきまして学術賞シルバーメダルを受賞いたしましたので，ご報告申し上げます。

演題名は，「肺腫瘍に対する体幹部定位照射：中等度の線量を用いた線量増加試験」です。体幹部定位照射とは，いわゆる「ピンポイント照射」であり，高精度放射線治療のひとつです。本院では6年前より限局型肺がんと転移性肺腫瘍に対してこの治療を行ってまいりました。がん病巣に集中して1回あたり通常の3～5倍の線量を投与しますので，安全性が問題になりますが，今回の検討では61例中56例で腫瘍が制御され，重篤な副作用を認めませんでした。特に3cm以下の肺腫瘍では手術に匹敵する治療成績であり，合併症や高齢のために手術ができないような患者様にとって，まさに朗報です。

体幹部定位照射は世界に先駆けて日本で始まった治療法であり，最近は海外からも注目を集めています。体幹部の腫瘍は呼吸性移動があるため，線量の集中が困難とされておりましたが，最近導入された呼吸同期PET-CTや画像誘導照射技術の進歩により，その問題も克服されつつあります。現在は肺腫瘍が良い適応ですが，今後は，肝がん，腎がん，膵臓がんなど，様々ながんに対する適応の拡大も期待できます。

最後になりましたが，長年にわたりこの研究をご指導いただいた故阿部由直先生に感謝の気持ちを伝えたいと思います。ありがとうございました。

再来受付・採血受付を８時からに変更

3月30日から，本院の自動再来受付機及び中央採血室受付の開始時刻がこれまでより20分繰り上がり8時からに変更されました。

これにより，外来中央待合ホールの早朝の混雑が解消され，これまでは患者様が20分ほど立って並ぶこともありましたが，変更後は混み合っているときでも5分程度に改善され，患者様の評判も良くなっております。

また，当日の採血による検査結果が出てから診察を受ける患者様の便宜を図るため，検査部等の勤務体制を変更し，中央採血室における採血を早く始められるようにしました。その結果診察を受ける時刻が早くなり患者様からは喜ばれております。

これとは別に，職員の勤務時間短縮により，4月1日から診療時間が8時30分～17時に変更され，診療終了時刻が15分早くなっております。

（医事課）

弘前ライオンズクラブに感謝状贈呈

本院は弘前ライオンズクラブ（白石一雄会長）からガートル掛け付き車椅子50台と「津軽領元禄国絵図写（複製縮小版）」一式の寄贈を受けたことに伴い，4月14日病院大会議室において感謝状贈呈式を行いました。

これらの物品は，弘前ライオンズクラブ認証50周年記念事業の一つとして本院に寄贈されたもので，白石会長ら6人が本院を訪れ，「弘前大学病院は地域になくてはならない存在であり，療養環境の充実に役立ててほしい」と話され，花田病院長からは「芸術品は心が安まり，本院の車椅子は古くなっていることから大変ありがたい」と謝辞がありました。

車椅子は各病棟に配備し活用されております。津軽領元禄国絵図写は平成20年8月に本学附属図書館で発見された貴重な史料で，四分の一に縮小したものを外来診療棟1階エレベーター前に展示しております。

（総務課）

院内コンサート開催

本院では患者サービスの一つとして院内コンサートを㈶弘仁会の協賛を得て開催しております。

今年度は，4月24日を皮切りに，5月22日と二回開催されました。4月は毎回好評を得ている熊木晟二さんご家族による「スプリングコンサート」と名打ってのクラシック，ポピュラー，童謡などの名唱の数々。患者様と一緒になっての外来待合ホール一杯に響き渡る合唱など患者様演奏者共々大いに楽しむことができました。

さて，5月は4月のはずんだステージとは打って変わり，「弘前大学グラスハープ･アンサンブル」による清澄な癒しの音楽，グラスハープを初めて聴く方が多く，演奏を目の当たりにし，驚嘆と深い感動に喝采の拍手が鳴り止まぬほどでした。演奏終了後，グラスハープに触れ音を出して楽しまれた患者様も多く見受けられました。

（医事課）

【 編集後記 】

南塘だより第54号をお届けいたします。ご協力いただきました皆様ありがとうございました。

4月から職員の勤務時間短縮が始まりました。少子化対策や男女共同参画といった視点から取り上げられてきたワークライフバランスは，医療従事者が自然と集まってくる「マグネットホスピタルづくり」に大きなウエイトを占めるといわれています。その一端が多様な勤務形態や勤務時間といえます。勤務時間短縮が，患者様，そして私たち職員にどのような変化を及ぼしているか，その成果はこれからです。ゆとりそして，やりがい・充実感を持ちながら働き，仕事上の責任を果たしかつ，ライフステージの各段階に応じた生き方ができるよう創意工夫と試行錯誤を重ねてゆくことも大切ではないでしょうか。

（F・Y）